

## 第 8 回〔IV〕実社会における議論力と企画デザイン力を鍛える

### （1）言語技術力を訓練する

「21 世紀の情報社会における競争力の源泉」は、国民の「情報システム活用能力のレベル」に大きく依存すると考えます。情報システムの活用能力を高めるには、「論理的思考力とコミュニケーション力」とそれを支える「言語技術の運用スキル（技能）の能力」の鍛錬にかかっていることも明らかになりました。日本人にとってこの「論理的思考力とコミュニケーション力」のレベルがどうだったかをチェックすると、どうも「日本にはそこに弱点があった」と客観的に認識できました。

私たちは、今後、国際社会の諸問題への取組みでの協調行動をとる上でも、世界の競争市場で企業の経済活動上の比較優位を競う上でも、相互理解と利害を調整するための交渉力を支える「共通言語」「標準言語」とも言うべき「論理的思考力とコミュニケーション力」の能力を高める必要があります。更にその基礎となり対話と議論力を鍛える源となる「言語技術力」について、実は日本・韓国・中国を除いて、欧米とその他諸国の教育体系が幼少期から体系的に教育課程の中核に位置付けています。この言語技術力(Language Arts)の育成強化が、日本人の弱点を克服するための根本対策となることについて、認識を改めて深める必要があります〔脚注1〕。

初等中等教育の学習指導要領においても「言語力強化」が柱の一つに採用され、国民的課題として学校教育上の必須課題と認識されました。そして、勿論、既に社会人となって日々社会で活躍するビジネスマンに対しても、この「論理的思考力」や「コミュニケーション能力」強化の課題を放置しておくわけにはいかないでしょう。

世界中の人々が会話を交わす中で母語の相違を超えてコミュニケーションできるための共通の言語技術力とは何か？ これを社会人として実用的な視点に立って言うならば、**言語技術力とは、人々が「ものごと」について「描写」したり「説明」したりする場合に「分かり易く」伝達し合うこと、あるいは様々な問題点について「議論」し「対話」する場合に、論点を明確化し、相互の理解内容を高め建設的な解決策を見出すことを目指す上での言葉の使い方、運用のためのスキル（技能）**であります。重要なことは、この言語技術力は、いつ訓練を始めても能力向上の効果が必ず現れるものであることです。

### Jリーグが「言語技術教育」を採用

日本サッカーリーグでは、指導者になるための資格取得、選手の育成、JFA アカデミー（中学 1 年段階からの育成コース）において、三森ゆりか先生の指導の下で言語技術教育をカリキュラムに導入しています。その導入の動機について田島幸三専務理事が次のように語っています〔脚注2〕。

平成 93 年の J リーグ開始後、当初 10 チーム中 8 チームは日本人監督が率いていたが、95 年には 14 チーム中で 3 人にまで日本人監督が減ってしまった。一体何が原因なのかを調べたところジーコ選手を始め著名な外人選手から言わせると、『この練習は何のためにやるのか？ どうしてこのシステムでやるのか？』を問われたが、日本人監督は答えることが出来なかった。その対策として、日本サッカー協会は、ディベートの訓練を開始した。練習や試合の中で『どうしてあそ

1 三森ゆりか・つくば言語技術研究所所長、「日本・日本語・日本人」（大野晋 森本哲郎 鈴木孝夫／新潮選書）

2 文部科学省研究開発学校 平成 18 年度（研究第 2 年次）研究報告会 麗澤中学・高等学校 言語技術フォーラム 研究報告書 平成 18 年 11 月 25 日における田島専務理事のご説明内容から。

『こへパスを出したのだ？』と質問を受けたことに対して、根拠を挙げて理由づける説明ができるかどうか、チーム全体の実力を上げる上での鍵となるとのこと。1 ゲームあたりは 300 回～400 回のパス回しが一人にあるのでその都度論理的に考えることを 1 年～2 年励行しているかどうかで、圧倒的な差が生まれるはずだ。オシム監督と一緒にいると、「論理的に言うと・・・、何故ならば・・・」という台詞が何度と無く語られるそうだ。最後に田島氏は、『中田もイチローも日本社会では生意気と言われた。何故この練習は必要なのか？と聞くから。』と述べて話しを終えた。

以上の経験と研究を踏まえて、日本サッカー協会では、現在、つくば言語技術教育研究所の三森先生を招聘し、JFA アカデミー福島にて、中高生へのサッカー指導に、欧米で広く行われている「ロジカルコミュニケーションスキル」コースを導入した。この「言語技術」の教育は、Jr リーグの選手の指導にも取り入れられている。

田島氏曰く、「何故言語技術が必要か？それは今、世界が見えてきたからだ。世界と戦うことができるレベルに上がったからこそ、その必要が必要である」と。

言語技術教育の採用は、サッカーという「世界の強豪とのスポーツの勝負の世界」において、「チームで戦うためには考え方をはっきり相手に提示し合い、共通のフォーメーションで戦うコミュニケーション力を鍛える」ことを目的にしたものです。「言語技術力」の鍛錬の必要性和効果を切実に認識し実際に導入してきた体験談は、「世界で通用するために」という明確な問題意識の基で実践的に取組まれていることによって、私たち日本人に、自身の「弱点」の本質と根本対策が一体何であるかをこれ以上無いほどの明確さとリアリティで日本人に突き付けていると認識します。

## “言語技術教育”の意味することの本質は何か？

「言語技術」という言葉は、今から 30 年程前に学習院大学の木下是雄氏が使用した用語と伝え聞きます。ここでは、つくば言語技術研究所の三森ゆりか氏が、その私塾にて小中学生から指導を行う、欧米諸国において初等中等高等教育課程での母国語における国語教育にて共通に利用されている指導法に準拠した教育カリキュラムを指しています。田嶋専務理事はその近著〔脚注<sup>3</sup>〕で、「サッカーというのは、唯一の正解が無いスポーツだからこそ、監督は自分なりに論理的に考え抜いた上でこの方法が一番良いのだということを根拠（エビデンス）をもって選手たちに納得させなくてはならない」と語っています。この「根拠をもって」説明することが、言語技術教育の原点であり本質であります。

三森ゆりか氏がどのような切実な動機から私塾を始めたかの真意を理解すると、言語技術教育の本質をより明快に理解できます〔脚注<sup>4</sup>〕。

「なぜ言語技術教育が日本人に必要なだと考えたのか？ → 西ドイツの中高一貫校で過ごした四年間、私はずっと劣等生でした。学校では、ドイツ語（国語）、英語、歴史、現代社会、経済、物理、美術、音楽・・・など、様々な科目で、資料となる文章や教科書、新聞記事、絵や楽譜などに基づいて議論し、その後に宿題として必ず小論文を課されました。ドイツ語が出来るようになって、「国語」で培った言語力では議論に参加できず、小論文の書き方もわかりませんでした。同じ状況が、大学卒業後に勤めた総合商社でも見られました。『言語技術』で培われた言語力を駆使して交渉に挑んでくるドイツ人を前にして、日本の商社マン達は終始圧倒され続けました。学校で指導されている母語教育が、国際交渉の現場で血肉となって機能している様を見て、私は日

<sup>3</sup> 『言語技術』が日本サッカーを変える」田嶋幸三/光文社新書

<sup>4</sup> 文部科学省研究開発学校 平成 18 年度（研究第 2 年次）研究報告会 麗澤中学・高等学校 言語技術フォーラム 研究報告書 平成 18 年 11 月 25 日での三森ゆりか氏のご説明から。

本人にも言語教育が必要だと考えました。「自分の子どもだけは国際社会に出たときに、堂々と主張できる日本人に育てたい」それが、私が言語技術を教え始めた動機です。」

「(母語としての言語の相違はあっても) 考えるときの仕方、論点の運び方を観察すると、いずれの国民でも、同じ体系で考え、議論を運んでいくのです」「ドイツのボンでは、外国人の受け入れ学校があり、全世界の子供たちが、ドイツ語を学び、議論の仕方を学び、それを作文にまとめるという方法で学んでいます。ヨーロッパの他の国からやってきた子供たちは、言語教育としての共通のカリキュラム体系の下で訓練を受けているので、ドイツ語自体が拙いレベルの段階であっても、『議論ができる』『作文での論点がきちんと書けている』ので評価されるのに対して、日本から来た自分はそのような言語技術体系での教育を子供の頃から受けていないために、どのようにしたら良いかわからず、いつまでたっても『議論に全く入れない』状況だった」「毎回言われたのは『感想文ではなくてきちんと論理的に書きなさい』『感覚は要らない』といわれ続けました」

## 言語技術教育ではどのようなことを教えるのか？ ～ 感性と論理との対話 ～

言語技術教育の手法そのものは、欧米の諸国においては共通に学ばれている母国語である国語の運用技術の訓練であり、小学 1 年次～高校 3 年次までの初等中等教育課程に長年実施されてきている教育の体系・方法論とその実践である。

(末尾 参考 1：欧米共通の“母語教育(言語技術教育)の体系の概要を参照してください)

日本人に向けて言語技術教育を導入するに際しては、欧米とは異なり、初等教育の 1 年次生の基礎からトレーニングを全く受けていない事情の相違を考慮に入れて、コミュニケーションスキルを指導するための前段の訓練プログラムとして、(1) 問答ゲーム(対話の基礎)、(2) 情報伝達トレーニングのための基礎トレーニングが、細心の注意を払って用意されています。

「絵」を対象に「どのようなことが描かれているか」、即ち「情報」を読み解くことがクリティカル・リーディングの基礎訓練となります。「絵」の種類は、イラスト・交通標識・住宅の間取り・地図上の目的地までの行き方・コママンガ(文字説明を省略)などに範囲を広げることができます。「情報を読み解く」ための手がかりが、「観点」です。よく言われる「5W1H」は観点のセットの一つです。図 2 の「絵の分析」項目(カテゴリー)として 10 要素が例示されています。

「読み解き」をした内容を他の人に説明することが「コミュニケーション」の訓練です。図 3 に示す「論理の三角形」は、図 2 を題材に「場所が海辺に近い」ことを絵に描かれている「事実(データ)を具体的に引用して、さらに「灯台」が「海辺」を連想させる「裏づけ」となる事柄を示すところまで、「根拠(Evidence)」を提示することを徹底しています。言語技術

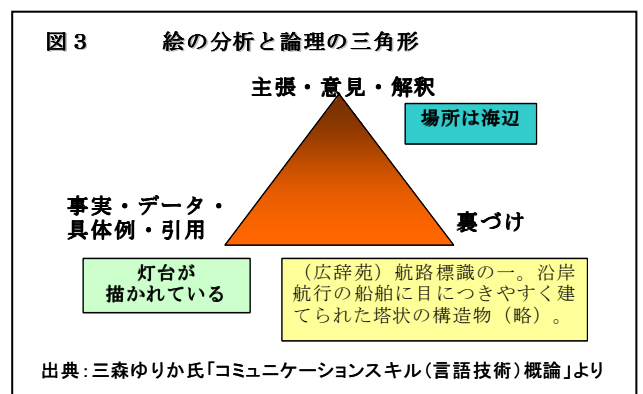
図 1 「交通標識」の分析 

図 2 「絵」の分析 

「絵の分析」項目(カテゴリー)

- ① 場所
- ② 季節
- ③ 天気
- ④ 時間・時代
- ⑤ 描かれた人物
- ⑥ 何が起きているか  
何を意味しているか
- ⑦ テーマ
- ⑧ 【必要に応じて】象徴
- ⑨ 【必要に応じて】  
構図・色・描き方など
- ⑩ 【絵の分析終了後】タイトル

出典：三森ゆりか氏「コミュニケーションスキル(言語技術)概論」より



教育の1時間の授業の中では、先生の質問に対して、生徒が答える場面では、必ず「何故そういえるのか」を「説明」する方式で行われます。別の意見を発表する生徒も自分の「考え」の「論拠」を提示します。すると複数の生徒間で「明示された論拠」の是非をめぐって意見が提出されて議論のプロセスが始まります。このように“思考を止めず”に誰にとっても納得できる“論拠”を示すことを必ず求めることによって、客観的な説明→対話→議論ができるための成長ステージを用意していくのです。つまり「対話」「会話」が言語活動の原点にあります。

「絵」の読解の手法の基本を基礎として、「テキスト」、即ち物語・小説の読解の訓練へと進みます。一般に私たちは、自分も含めて、絵本を「読む」ことは、小説を「読む」とこと異なる事柄と理解しているのではないのでしょうか？しかし、言語技術の面から捉える場合には、「絵」の作者の意図と描かれた内容を読み解くことと、小説の作者の意図と書かれた内容を読み解くことは、「情報を引き出し解釈する」ことの本質のところでは共通の「情報行動」であります。

・ テキスト分析(クリティカル・リーディング)の方法

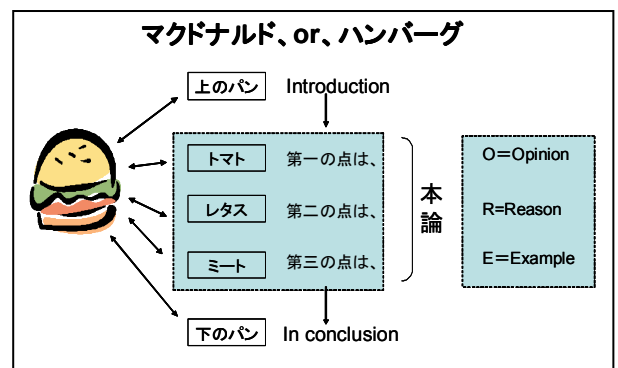
- 作家: どんな人か
- プロットとストーリー: 構造・ジャンル
- 視点: 何人称か 語り手は誰か
- 時制: どの時制か 時制が変更する点はないか
- 文法: 特殊な文法が使用されていないか
- 語彙: 特殊な語彙が用いられていないか
- 登場人物: 名前・性別・年齢・性格・容姿・服装・行動・表情・状況(状態)・階級・出身・職業・地位・社会的役割  
言葉遣い・家族構成・考え方 他
- 設定: 時代背景・場所時間・季節・天気 他
- 主題: 題名・主題(翻訳ものでは、原題の分析)
- 象徴: 隠(暗)喩(メタファ)
- その他

このようにクリティカル・リーディング（読解）は、全ての母語に基づく「論理的思考力とコミュニケーション力」の基盤をなすものであります。そして、毎回の「言語技術」教育の1回の授業の最後に「自分が読み取った情報内容」を「エッセイ（小論文）」に書いてまとめることが宿題として課されます。この反復訓練を継続的に行うことによって、自分の意見（論評）を書くことに慣れ親しんでいきます。クリティカル・ライティングの基礎は「パラグラフライティング」にあります。末尾の「参考2：小論文の書き方」を参照してください。

「絵」、「小説」に加えて「芝居・劇」「ドラマ」「映画」「ミュージカル」「オペラ」「演奏会」といった芸術の作品の数々は「読解」の対象となります。自身の「感性」は「説明」という言語技術の媒体によって「形化」され、「分かり易い」ことのための「論理」性の「確かさ」を規準に持つことによって「感性と論理の対話」の世界が生まれてくることとなります。

“読解力”は国際社会で常識とされる基礎能力

米国では、中学生・高校生が自分の意見を述べる時、右図に示す「ハンバーグ」の出来あがり方の連想を例えとして、話し方の指導を受けます。そして、「自分の意見」を述べるのが基本となります。このような答え方の基本は、日本の実用英語技能検定1級の2次試験での「スピーチ」の良い模範となり訓練方法の基本となります。即ち、欧米語を学ぶことは、語彙や統語法の相違の問題だけではなく、「考え方」「論旨」の運び方の訓練として重要視される所以がここに理解できます。読解力・論理的に考える力が国際社会の基本といえます。以上



（メルマガ第8回）



参考 1：欧米共通の“母語教育”（言語技術教育）の体系の概要

			ドイツの母語教育のカリキュラム			
		学年	年齢	対話(話す・聞く)	読解(読む)	作文(書く)
小学校	1	7			読解	
	2	8				聴いて理解する 物語の再話 "Nacherzählung"
	3	9				
	4	10				
中学・高等学校	5	11	デ イス カ ッ シ ョ ン	デ イ ベ ー ト	物語・短長編小説の要約 "Inhaltsangabe"	物語(年齢7-11) 視点を交える(11-12) 説明・描写(9-14) レポート(11-14) アピール(11-12) 議事録(14-15) 手紙(7-13) ブックレポート(12-14) 名画の説明と分析(16-17) 小論文(15-17) 論文(17-19)
	6	12				
	7	13				
	8	14			テキストの分析と 解釈・批判 "Interpretation"	
	9	15				
	10	16				
	11	17				
	12	18				
	13	19				

出典) つくば言語技術教育研究所 所長 三森ゆりか氏作成資料

参考 2：小論文の書き方

